

高層ビル群に敬亭山を擬す

浜田 道雄

数年にわたる熱海での一人暮らしに区切りをつけて東京に戻り、息子たちと暮らすようになって一年半近くが過ぎた。

熱海では一人無聊に過ごすことが多かったから、そんなときにはいつも海を眺めて過ごした。海は時々刻々また季節の移ろいにつれて、その表情を変えていく。そんな海を見るのは楽しかった。

いまは五月。相模湾は春の霞に烟る穏やかな海から黒潮の入った濃い藍色の海になり、水平線は海と空とをキリッと分けているだろう。

世田谷の私の部屋からは海は見えない。しかし近くに高い建物がなから、高円寺の集合住宅群からはじまって新宿、渋谷、麻布へと続く高層ビル群の山波が空と地をわけているのが一望のもとにある。その下には、低層の家並みが海のように波打って広がる。今日の人工都市東京の西北部から東部に広がる広大な「海」だ。

この人間の作った「海」も熱海の海と同じく、季節の移ろいや日々の時間の推移を見せてくれる。新宿の高層ビル群の手に広がる神宮内苑の森や、近くの世田谷の古木を残した小さな公園の巨木の森がそれた。これらの緑の「島々」は春には花々や新緑で身を飾り、秋には鮮やかな紅葉を纏う。この人工都市の「海」は、熱海の海とはまた違

った景色を眺める楽しさを教えてくれるのだ。

夕方、窓辺にロッキング・チェアを寄せて、夕日に照らされた新宿の高層ビルを眺めていると、その壁を夕闇が徐々に小山を登るかのように這い上り、やがて頂上を包み込んで行くのが見える。

ある日の夕暮、いつものように暮れゆく高層ビルを眺めていると、ふと李白の「独坐敬亭山」が頭に浮かんできた。

気がついてみると、下の公園でさっきまで小鳥のように騒がしく互いに叫びながら遊び戯れていた子供たちの声も聞こえなくなり、空の夕焼けに赤く映えていた雲もいつの間にか消えていた。いま私の眼前にあるのは、先端に僅かな夕映えを残している高層ビル群だけだ。そうだ、あの新宿の高層ビル群を敬亭山に見立てて李白の詩情にあやかながら、そろそろ酒でも飲みはじめるとしよう。

まもなく「敬亭山」の右手から月も登ってくるはずから。

(参考) 独坐敬亭山 李白

衆鳥高飛尽 さっきまで騒がしく飛び回っていた鳥たちはどこかに

孤雲独去閑 飛んでいつてしまった。空にたったひとつ浮かんでいた

相看兩不厭 雲もいつの間にか消えてしまっている。

只有敬亭山 今互いに見つめあっているのは、ただ敬亭山だけだ。

敬亭山 中国安徽省宣城市にある山。高さ三〇メートルほどの小山だという。